

祈

inori

り

神輿渡御

悪しき病をもたらす御霊を退け、散じ
津々浦々やすらかに幸あれかしと祈る、勇壮の神輿渡り。



中田 昭・写真
photographs by Akira Nakata
安藤寿和子・文
text by Suwako Ando

風

furyu

流

山鉾行事

清らかな音、金銀の飾りに綾なす絹々。
妙なる美しさで荒ぶる疫神を慰め、人もまた和らぎ楽しむ。





祇園祭発祥の地「神泉苑」での儀式。還幸祭での神輿渡御の折、中御座神輿は神泉苑に立寄り、住職による「洒水(しゃすい)」など真言密教の作法での加持、さらに宮司から拍手を打っての神式の誠にを受ける。この祭りのルーツが偲ばれるワンシーン。



17日の神幸祭に先駆けて行う神輿洗式。大松明の炎による「道しらべの儀」の後、中御座神輿一基が進み、鴨川にかかる四条大橋の上で神事が斎行される。

gion matsuri

祇園祭

来し方、ゆくすえ

疫神すら心尽くしのもてなしで迎え、ともに賑わい、幸いを願う。千年の祭りに託された、都びとの「祈り」の心と「風流」の気概。時を越えて守られ、受け継がれ、未来へと伝えられてゆく祇園祭とは――。

神輿のルーツ

その昔、疫病や天変地異など、人々の安らかな暮らしを突然に襲う災厄は、御霊の所業と考えられていた時代がありました。

苗一本すら残らないほど」の大地震大津波が起ったとの記録も(『三天実録』)。そんな中、帝の庭である禁苑、神泉苑において大掛かりな御霊会が行われたのは、都の厄災除けに留まらず、全国津々浦々の幸いをも願ったことだったのでしょう。

「御霊」とは、すなわち怨霊。ことに京の都では、政争に敗れ、憤悶のうちに世を去った高位の人々のやり場のない魂を「御霊」と呼んで畏れ、その御霊鎮めのまつりごと「御霊会」を行うことで安寧を願ったのです。祇園祭の起源とされる「祇園御霊会」もそのひとつ。長岡京から平安京へ、都遷りから七十余年ほど経った貞観十一年(869)六月七日、勅命によって卜部日良麻呂が、当時の国の数に準じた六十六本の矛をたて、また同十四日には祇園社(今の八坂神社から神泉苑へと素戔嗚尊(牛頭天王と習合)を奉じた神輿を送り、盛大な御霊会が行われた――それが、今に続く祇園祭、神輿渡御のルーツと伝わります。

現代のような交通手段も情報網も、絵物語すらなく、都の外のことなど、ほとんどの人には知る術もなかった時代、はるか遠国の受難にも心馳せ、荒ぶる疫神の鎮まりを切に祈願するまつりごとがあり、そこに集う数多の人があった。そんな祈りの神事の心根を脈々と受け継ぎ、今日の祇園祭があるのです。

神渡る七日間

貞観十一年というのは難儀の年であったようで、都での疫病蔓延だけでなく、陸奥国(東北地方)では「地が裂け海が喰り、稲

この祇園御霊会に由来する六月七日、十四日は、新暦になって七月十七日、二十四日に改まり、現在の神幸祭、還幸祭となっています。十七日の神幸祭の夕刻、八坂神社のご祭神の御霊を遷した三基の神輿が、人々の暮らし近くの御旅所へと出座。氏子地域を渡御したあと七日の間を御旅所に留



まり、二十四日の還幸祭の日、再び氏子地域を一巡し八坂神社へと戻ります。中御座に主祭神の素戔嗚尊、東御座にそのお妃の櫛稲田姫命、西御座に八柱御子神を戴き、「ホイット、ホイット」の掛け声とともに大路小路を駆け巡る神渡りは、山鉾に象徴される優美な祭りの印象とは一転、厳しい神気に弾かれるような勇壮さ。しかしこれこそが、千百年以上の歴史を持つ祇園祭の本旨であり、一ヶ月にもわたる祭礼の、もっともコアの部分といえるのです。

山鉾の登場

祇園祭の華、山鉾風流。「ふりゆう」とは中世のエネルギーで濃密な空気の中で育まれた美のかたち。祭礼での派手やかな意匠や作り物、さらには囃子や踊りを含めた芸能までを総称する美しい言葉です。それら風流の極みが、今日、動く美術館とも称される祇園祭の山鉾風流でしょう。

祇園のお社から悪疫退散のために神がお渡りになる、その「おいで」(神幸祭)を、美々しい風流で賑やかに迎え、お迎えする(還幸祭)にはまた、華やかに礼を尽くして

お見送りする。神へのもてなしの歌舞音曲が次第に盛大となり、今に見る山鉾巡行へと発展してきたのです。「おいで」に伴う巡行を「前祭」、「おかえり」に伴う巡行を「後祭」と呼び、現在は前祭二十三基、後祭十基の山鉾が華麗な巡行を繰り広げます。そんな山鉾の原型とおぼしきものが祭りに登場するのは、最初の祇園御霊会から百年以上後のこと。長保元年(999)、无骨なる雑芸人が「作り山」で衆目を集めたとの記録が残ります(『本朝世紀』)。「山」とは基本的に屋根のない舞台車のようなもので、その上に神の依り代の真松を立て、人形を乗せたり、猿楽や舞など演じて見せたりしていた時代もあるようです。

いっぽう「鉾」は、神泉苑に六十六本たてられたという「長さ二丈許(約六m)」の矛(劍鉾)が源流と見られますが、今のようにならぬ鉾の付いた大きな鉾姿を見せるのは、「山」の登場から、さらに数百年後の南北朝末期。この頃から山鉾は年々華やきを増し、祭りの呼びものとなっていくたようです。時の権力者たちの台覧も多く、足利義満は若き日の世阿弥を数回観劇の側近く



山鉦巡行の先頭を行く長刀鉦、辻廻し前の緊張の瞬間。音頭取りの扇子さばき、掛け声を合図に巨大な鉦がゆらりと動く。

gion-e 祇園会



一昨年、150年ぶりの復活で大喝采を浴びた大船鉦。吹き流しを風にはためかせ、堂々の巡行で後祭のしんがりを飾る。

に侍らせ、風流見物に興じたとか（『愚問答記』）。やがて十五世紀半ばには六十基もの山鉦が巡行したそうですが、そのほとんどが応仁の乱（1467〜77）で、京の町もろとも焼き尽くされてしまいます。

町衆の祭りへ

山鉦はおろか、戦火を逃れ、住む人さえも居なくなった大乱後の京の町に、再び山鉦が姿を見せたのは明応九年（1500）。この時、山鉦の復興を全面的に支えたのは、逃れていた諸国からこの地に戻り、商いを始めた京の町衆でした。

八坂神社の記録のひとつである『祇園社記』に、明応九年に巡行した前祭二十七基、後祭十基の山鉦の名前が、巡行順とともに記されていますが、驚くべきは、多少の変

化廃絶はあれ、その時に居並んだほとんどの山鉦が、五百余年の時を越え、今に受け継がれているということです。

「ウチの鉦が天下」「いや、我が町こそ」商いの隆盛とともに力を増した町衆は、ゆたかな財と教養を背景に綺羅を競い、興を尽くし、エキゾチックな異国の織物や毛皮までも駆使した懸装で「前人未踏」の美の世界を築いてゆきます。とはいえ、長い歴史の中では逆風も少なからず。幾たびもの大火災、政変、商いの浮沈、そして人の暮らしの驚愕の変わりよう。そんな転変の中、つねに時代の新風を取り込みながら起死回生の策を探り、いくつもの世代がバトンを渡し、受け取り、また渡して……。神も人も楽しませる祇園祭の山鉦風流の伝統が磨き上げられてきたのです。

宵山の楽しみ

一昨年は幕末の焼失以来、巡行に出なかった「大船鉦」が百五十年ぶりの復活を遂げ、次には「鷹山」が巡行参加を目指しての準備を本式にスタート。数百年の歴史を背負いつつ、新たな時代への歩みもまた始まっています。

絢爛の山鉦巡行と勇壮な神輿渡御。そのふたつが対となつて湧き立つ祇園祭ですが、そこにもうひとつ欠かせないお楽しみ。それが「宵山」です。巡行前の数日、町内に山、鉦を建て、ご神体をお飾りし、祇園囃子を奏でるこの期間は、お祭りを間近に控えた独特の高揚感が町が染まります。ゆつくり暮れる夏空に駒形提灯の灯が映える頃、風につてあちこちから聞こえる祇園囃子。

コンチキチンの響きをたよりに、基盤の目の辻々を曲がるたび、違う鉦、山に出会うそぞろ歩きは、巡行や神輿渡御とはまた違う、しみじみとした情緒があります。異国の神話を描いた古渡りの織物や、技を尽くした鍔（かぶ）り金具など、山鉦を彩る懸装品を驚くほど間近に見られるのも魅力。とくに山鉦の数の少ない「後祭」の宵山では人の流れもゆるやかで、静かな祭り風情を味わいたい人にはうってつけでしょう。

清らかなお囃子、目を見はる装飾、そして人々のさんざめき。この音を、この色を、遠い昔の人たちもまた、耳にし、目にしていたらうと思ひ馳せる時――。私たちは一瞬にして時代（とき）を越え、先人たちとともに祭りを楽しみ、祈る心を共有できるのかもしれない。



見事な懸装品が間近で見られるのも宵山の楽しみ。写真は北観音山。囃子方が腰掛ける欄縁の真下に見える下水引は「金地王侯行列図」の豪華なもの。

胸打たれたご長老の紋付姿

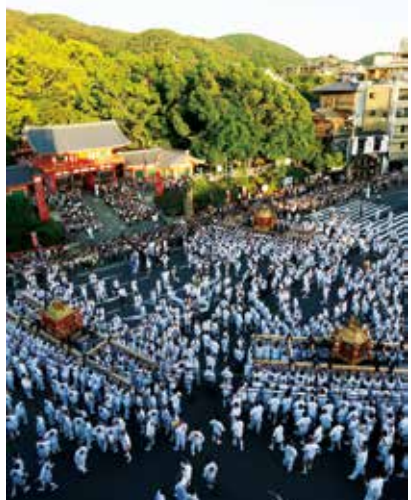
宮本組とは、その名が示す通り「お宮のも」とで神さんにご奉仕をする氏子組織」です。八坂神社に限らず、全国各地のお社に、それぞれの宮本組はあるはずのものだと思いますよ。

我々、八坂神社の宮本組は、氏子地区の中でもひとときわ神さんに近い、八坂神社のお膝もと、祇園町の住民が主となって構成されており、もっとも大事な役割は、千百年以上もの間、脈々と受け継がれてきた祇園祭が、毎年つつがなく催行されるための諸々の御用を、陰にひなたに勤めさせていただくことです。

宮本組の姿が、お祭りをご覧になる方の目に触れるのは、七月十日と二十八日の「神興洗」、そして十七日の「神幸祭」、二十四日の「還幸祭」の神興渡御で御神興の先導を勤める時くらいかもしれませんが、実際は、それ以外の裏方の仕事のほうが割合はずっと多いですね。言葉は悪いけれど、相当な「祭りバカ」でないと、なかなか勤まらないことと思います。

めは、この地に暮らす者にとって、それは栄誉な、嬉しいことでもあります。皆さん、祇園祭というところ、どうしても「山鉦巡行」に目が行くでしょ？ 確かに山鉦の巡行は見応えもあるし素晴らしいものですが、お祭りの根幹は素戔鳴尊はじめ八坂神社のご祭神方が、まず四条寺町の御旅所へ、そして氏子の住む町々へお出ましになる神興渡御。それがないことには祭りは成り立たんです。そのお渡り、お還りの行列を、円融天皇さんの勅令が書かれた勅裁御板はじめ、御桶、御弓など貴重な「御神宝」を奉持して宮本組が先導するのですから、責任重大であるとともに、何ものにも代え難い誇りも持っております。私共、宮本組の先導により、素戔鳴尊の荒魂として久世の綾戸國中神社から来られる久世駒形稚児が続き、御神興が続くのです。

祇園会



すよ。宮本組の装束に身を包んで祭りを先導なさるご長老を見て「カッコええやん！」と。私の場合は二十歳の頃。そこから宮本組の一員に加えてもらいました。早くに親父を亡くした私にとって、組の長老、諸先輩方は、親父に代わって「男の背中」を見せてくださる大人。とくに、先々代組長の杉浦貴久造さんは憧れの人でした。あの方



原 悟 (はらさとる)

八坂神社氏子組織・宮本組組長。八坂神社西楼門の石段下、祇園町に生まれ、20歳より宮本組組員として祇園祭神事に奉仕。副組長を長く勤めた後、2015年6月に組長職を継承。前組長らとともに、歴史ある宮本組の旧習の復興に取組み、神興先導時に役員が身につける「白麻帷子に袴」の美しい装束の復活も、その成果のひとつ。「御香煎」や「黒七味」で知られる原了郭の13代目当主としても手腕を発揮する。

の紋付袴姿を見て、いずれは組長になりたい、と思った時代がありました。
当たり前前のことを、**当たり前前**に
現在、宮本組に登録している組員の総数は百人弱、組織を実際に動かしているのは二十名ほどの役員で、その中でも幹事、常任幹事、三役といった段階があります。け

お宮を守る人々

宮本組組長 原 悟 談

っこうエッジの効いた縦社会です。しかし何か決め事をする時には、役員全員が納得できるまで話し合います。「上が言うから仕方なく従う」ではなく、皆が得心して決める。決めたからには守る。組織というのは、お酒飲んで親睦を計ることも必要ですが、それ以上に、芯のあるものを作っていかないと、いずれバラバラになる。心を正しく、ひとつにしていなとお祭りのご奉仕は難しい。で、そのために何が大事か、というと、それはごく簡単に「当たり前前」のことを当たり前にする」ということだけなんです。

昨年のお祭りでは、神幸祭の神興渡御に台風直撃の恐れ、という異例の事態となりました。大雨の中、果たして神興をどうするのか。組長になった矢先に重大な判断を迫られて、正直、たじろぎました。けど、そこでもやはり「当たり前前」の「以外に選択肢はないんです。祇園祭とは八坂神社から氏子町へと御神興が渡ること。ならば雨が降ろうが槍が降ろうが、御神興は御旅所へお渡り願わねばならんです。それを中心に据えて、あとは現実的な対策を考えよう。そう口火を切ったら、宮司さんはもちろん、神興会、諸団体の方々も皆、同じ気持ちでいて下さり、それこそ、心ひとつに祭りの催行が叶いました。皆、ズブ濡れで、えらいことでしたけどね。それでも清々しい経験でした。人間の都合でどうこうではなく、やるべきことは粛々とやる。お祭りとはそういうものやと思います。



八坂神社舞殿に並ぶ三基の神興。左より東御座、中御座、西御座。それぞれに榊稲田姫命、素戔鳴尊、八柱御子神の御霊をお乗せする。



駒形提灯が灯り、祭り情緒が高まる宵山の夕暮れ。祇園囃子の清らかな音色が心地よい。



宵山期間の数日、旧家や老舗の表の間を開け放ち、屏風などを飾って客迎いの設えを見せる「屏風祭」。道行く人の目を楽しませる美しい習わしである。写真は吉田孝次郎氏の自宅。京町家ならではの「空間」を生かす調度の取り合わせに、たっぷり活かされた贅味がみずみずしい。

忘れ得ぬ山鉾巡行の記憶

戦後七十年を越え、我々は斯くもゆたかに、賑やかに祭りに行っているわけですが、その晴れやかな場に身を置くにつけ、思い起こされるのは戦後の復興期の山鉾風流の光景です。

昭和十七年の巡行を最後に、建てることも叶わなかった山鉾が、再び都大路に姿をあらわしたのは昭和二十二年。京都市の観光局長と山鉾町の代表者がGHQに山鉾行事の復活を掛け合った上でのことでした。純粹に復活を願う気持ちがある一方で、神道の行いであるところの祭礼、それに列座する山鉾……という観点で、貴重な宝物が没収されるかも知れない。そんな危惧を抱きながらの陳情だったと聞いています。幸い、事なきを得て四条通りに長刀鉾、月鉾が建ち、長刀鉾は七月十七日に四条寺町まで巡行。ミリタリーポリスが警護する中、僅かな道のりの往復という変則的なものでしたが、稚児と禿を乗せての格式ある巡行でした。もう一基、函谷鉾も建てたい意向を示したものの、こちらは鉾の場所がGHQの駐車場の真向かいだったので、建てること罷りならぬ、との理由で断念。それが、

真つすぐ、堂々と正道を歩む姿を見ていただければ良い。

鉾町今

hokomachi konjyuku

戦後はじめての山鉾行事です。

翌二十三年は、前祭を代表して船鉾、後祭の代表として、我々、六角町の北観音山が建つことになりました。

サア、その時は、意気消沈しておった六角町が、にわかに活気づいたもんです。山建ての日の早朝、まず路上に、大きな部材がごろん、ごろんと転がされる。その音が、非常に雄々しく聞こえたのを覚えています。掛け声が町内中に響き渡り、山が組み上がっていくと、子どもらは「巨大ジャングルジムがあらわれた」とばかりに大はしゃぎで駆け登る。みなパンツ裸で、夢中でね。やがて蔵から会所の二階へ、胴掛け、見送りなどの渡来染織品、金色に輝く鎗り金ものが運び出された時には――、あの美しさはもう、全く、別世界の荘厳を見る思いでした。

日が暮れて駒形提灯に灯が入ると、今度は久方ぶりの祇園囃子が町内に流れます。この年、私も初めて囃子方に加えてもらったのですが、欄縁に腰をかけて鉦を叩いていますと、地上から我々を見上げてくれる熱い視線があるわけです。いやア、なんとも晴れがましく、嬉しいもんでした。けど、そこは澄まして、我、関せず……の態でい

会 園 祇

gion-e

ながら、たまにチラッと下を見たりして。これがなかなか、少年のシャイなところなんだすな(笑)。

そして巡行当日、とびきり上等の袴をつけ、真つすぐ正面を向いて北観音山を先導する、親父の姿――。昔日を知る旦那衆として、ごく当然の行いをしたまでのことですが、昭和二十三年、その姿は実に立派な、凛々しいものでした。振り返ればあれが、敗戦以降、僅かながらも自分たちの誇り、町に対する誇りを取り戻した瞬間であったように思います。

身を削り、気骨を示した先人たち

往時、山鉾町を支える旦那衆はどなたも、それは過酷な状況下にありました。戦後の財閥解体で痛手を受けたのは、三井、三菱といった大財閥だけではない、一般庶民のちよつとした資産家にも「財産税」が課せ



吉田孝次郎 (よしだこうじろう)

公益財団法人山鉾連合会・前理事長。京生活工芸館「無名舎」舎主。北観音山を有する六角町に生まれる。山鉾連合会理事長に就任と同時に、祇園祭の本来の姿を標榜する「後祭山鉾巡行」の復活を提唱。2014年に実現へと導く。また東北大地震の折には、山鉾町33ヶ町で義援金を募り、被害を受けた地区の祭りの復活、祭具の新調や修理を支えるなど、多大な功績を残し、2015年理事長職を勇退。現在は復興を目指す「鷹山」のサポートにも力を尽くす。

られたのです。今なら節税の術も探るところでしょうが、当時の人たちは、これは先祖が残してくれた財、いわば富裕の徳にかかる税、ゆえに先達の功を顕彰する意味においても、資産を少く繕って逃れることは良しとしなかった。それに加え、敗戦の余波から家長のお用いも多く、相続税もかかる。にもかかわらず、絹は贅沢品ということで、山鉾町の大半を支える繊維業界は商売も成り立たない。そんな時局の中、親父もまた、多額な税金の「のべ払い」に追われ、暗澹たる毎日を通じておったのです。

その親父が、祭りの日はかりは一変し、神々しいまでの姿を見せてくれた――。

これは私にとって「思い出」というようなノスタルジックなものではなく、生涯忘れ得ぬ「大事件」です。この経験なくして、おそらく今の私はなかったでしょう。

昔

吉田孝次郎 談